

大西会長就任メッセージ

10月1日の日本学術会議総会で、会長に再選され、第23期日本学術会議会長を務めることになりました。第22期の執行部の活動を会員の皆様に評価していただいたことが再選をもたらしたのだと思います。御礼を申し上げるとともに、そうした期待に応えるには、その活動を継承することが重要になります。しかし、同時に、半数が新会員となったので、私も、新しく選ばれた気持ちで、第23期の会長としての職務に臨みたいと考えています。

第22期においては、「科学者の意見集約機能強化」、「アカデミーの国際連携への貢献」、「国民との連携及び内外に向けた情報発信力」を、期を通した方針に掲げました。科学者の情報発信機能強化については、特に、課題別委員会や幹事会附置委員会等の形で専門分野を超えた横断的な委員会を多く設置して、提言や報告を発表しました。東日本大震災復興支援、原子力利用のあり方、科学研究の健全性向上、高レベル放射性廃棄物の処分のあり方、国際リニアコライダー研究施設の日本誘致、フューチャー・アース(FE)への取組等です。特に、リーダーシップを発揮することが期待されている幹事会の役割は大きく、幹事会附置委員会とその下の分科会の設置数と会議開催数は、これまでの期に比して突出して多いものになりました。国際活動では、ICSU、IAP/IAC、SCA等の科学アカデミー国際組織内で日本学術会議のメンバーが役員に選ばれるなど活発な活動を行い、特にIAP/IACについては日本でのシンポジウムを定着させました。また、社会科学の国際組織であるISSCと、アジアのアカデミーの一つであるAASSAへの加盟も果たしました。さらに、FEの国際事務局とアジア拠点の誘致に成功したことも大きな成果だと思います。情報発信力を強めるには、地道な活動の積み重ねが重要と思います。提言等を130編程発出した上、タイムリーな会長談話や幹事会声明、シンポジウム、記者発表等を行った結果、例えば全国紙への登場回数や全国紙社説での取り上げ回数においてもこれまでの右肩上がりの傾向を持続させることができたのだと思います。

もちろん、日本学術会議が本来果たすべき役割に照らせば、こうした成果は、十分とはいえません。科学者からの助言や見解が求められている領域はまだ多く、それらに十分応える活動ができているとはいえない現状にあると自覚しなければなりません。

第23期においても、科学者の力を結集して、内外に必要な助言や提言を行う活動を強化するという基本方針は堅持します。今年度も青色LEDの研究開発で、赤崎勇先生、天野浩先生、中村修二先生の3人がノーベル物理学賞を受賞することになりました。2000年以降では、日本の研究力が評価されたといえる受賞者は14人にのぼり、世界の科学者輩出国の枢要な一翼を占めています。ただ、一方で、近年、論文発表件数や被引用数が低下傾向にあることや、種々の研究不正が社会問題となるなど、こうした成果が

将来も持続され得るのかについて不安を覚える要素も存在します。科学研究の基礎的な活動を再構築しつつ、社会・産業への応用を含んだその発展を科学者自身が担っていく必要があります。第23期においても、科学研究や科学者育成の基盤を整えることを最重要課題としつつ、防災・減災・復興、エネルギー供給、原子力の安全管理、持続可能な開発・フューチャー・アース、大型研究の推進、科学研究の健全性、国際連携活動・二国間学術交流、研究やデータ発表のオープンな機会創出、高等教育の質確保、若手科学者の育成等のテーマに積極的に取り組んでいきたいと考えています。会員・連携会員の皆様のご協力をお願いします。

2014年10月15日 第23期 日本学術会議会長 大西隆